

# 婦人の妊娠並に産褥時に於ける耳鼻咽喉科 領域の機能に關する臨床的研究

## 第1編 妊娠並に産褥時に於ける聽力

金澤醫科大學耳鼻咽喉科學教室(主任松田教授)

武 内 博 文

*Hirobumi Takeuchi*

(昭和23年9月14日受附)

### 第1章 緒 論

婦人が妊娠並に産褥時聽力障害を來したり、或は既存の聽力障害が増悪することは、從來より注目された所である。Knapp は1871年妊娠につづいて起り間もなく聾となつた難聴例を報告し、其の原因を内耳に於ける漿液性滲出、粘膜炎下溢血なりと記載し、1925年 Stein は *Gravität und Otosklerose* なる論說に於て、妊娠の經過中に發現する難聴は何れも耳硬化症であると報告している。Muck は1926年其の臨床例に於て、耳硬化症と認めることの出来ない神経性難聴が存在することを指摘し、Stein の主張した耳硬化症は左程頻發するものではないと主張し、其の原因を頭部血管の交感神経緊張状態に於て、妊娠毒の作用により聽神経に異常を來したためであると解釋している。更に1929年 Willig は既往に於て、耳疾患のない6ヶ月乃至10ヶ月の妊婦35人を觀察し、骨傳導の短縮及び高調音の量的縮小等軽度の内耳性難聴を認め、且つ分娩後には之等の諸症状は6日乃至10日以内に消褪したのを確認し、難聴の原因を内耳に於ける「ヒヨロステリン」沈着によると推定している。次に鈴木氏(1930)は多數の妊婦並に産褥婦に於て輕微な聽力障害を認めたが、之れが中耳性のものであるか、内耳性のものであるか

の決定はむづかしいと述べ、又分娩後の恢復は Willig の記載した如く短時日では見られず比較的長時日を要したので、何等かの器質的變化即ち妊娠中毒症と關係があるものと推定している。昭和8年倉田、島野兩氏は13名の妊産婦に就て檢索を行い、7例の耳硬化症を認めたが、他の6例は一種の神経性難聴と見做されると結論している。小泉氏は昭和12年妊娠並に産褥時に於ける聽力障害の統計的觀察を行い、難聴は主に中調音以下低調音にわたるものが最も多いが、高調音に於ける障害も亦相當數を占めていと述べ、更に動物實驗を行い、妊娠並に産褥時の難聴は主に聽器の新陳代謝障害、就中脂肪物質の増加又は異常沈着によるものであるが、之れに神経系統の輕微な變化が加つたものと考へるのが妥當であると述べている。松田教授は日本耳鼻咽喉科學會第42回總會に於ける宿題報告「女性に於ける性的現象の耳鼻咽喉科疾患に及ぼす影響」の一部門に於て、妊娠聽器に就き其の概要を述べられておるが、著者は松田教授の命により、妊娠並に産褥時に於ける聽力に就き多數症例を蒐輯し、可及的綿密なる檢査を行い、其の變化の詳細を究明せんと試みた。

## 第2章 検査方法

### 第1節 検査材料

検査材料としては日本赤十字社金澤産院に於ける外来及び入院妊婦305名並に褥婦43名合計348名を選び、妊娠期間並に分娩前後の聴力に就て検索を行った。

### 第2節 実施方法

聴力検査法には諸種の發音體、就中音叉を以てする各種検査法と、囁語を以てする囁語検査法等があり、

臨床上普通利用されているが、本実験に於ては諸般の事情により、前者に於ける2、3の検査に就て實驗を行った。即ちハルトマン氏音階列(CC<sup>1</sup>C<sup>2</sup>C<sup>3</sup>C<sup>4</sup>)による聴取時間を測定し、これの健耳に於ける平均聴取時間に對する百分比を検索した外、骨導検査、リンネ氏法検査、ジェレ氏法検査を施行した。

## 第3章 實驗成績

妊婦 305 名中鼓膜に妊娠と無關係に存する病變を認めた症例は凡て之れを除外し、鼓膜に病變を認めない症例 104 名と、妊娠と關係ありと考へられる貧血像を有する症例77名とに就て検査を行い、前者に就ては第1節に於て、後者に就ては第2節に於て述べる。

### 第1節 鼓膜に病變を認めない

#### 妊婦の聴力

#### 第1項 各音叉(CC<sup>1</sup>C<sup>2</sup>C<sup>3</sup>C<sup>4</sup>)に對する

#### 聴力百分率と症例數との關係

鼓膜に病變を認めない妊婦84名、總検査數 107 例に就て CC<sup>1</sup>C<sup>2</sup>C<sup>3</sup>C<sup>4</sup> 各音叉に於ける聴力百分率と症例數を考察するに、第1表の如くである。

次に各音叉に就て聴力百分率と症例數との關

係を圖示する。(第1圖—第5圖)

即ちC音叉に於ては、右側は50%—55%のもの最も多く15例、次で65%—70%14例、70%—75%13例の順位となり、左側に於ては70%—75%のもの最も多く23例を數へ、75%—80%のもの18例、80%—85%のもの12例である。

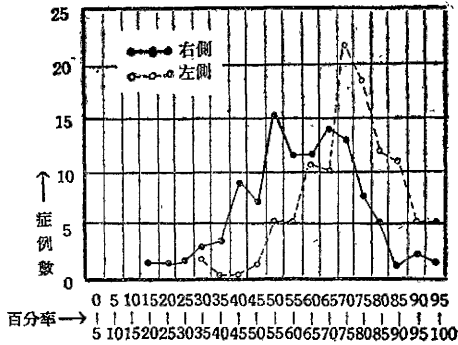
C<sup>1</sup>音叉に於ては、右側は70%—75%のもの最も多く21例、60%—65%のもの17例で之れに次ぎ、65%—70%のもの16例となり、左側に於ては75%—80%のもの22例で最も多く、次で70%—75%のもの20例、80%—85%のもの15例である。

C<sup>2</sup>音叉に於ては、右側は55%—60%、65%—70%のもの共に19例で最も多く、次で70%—75%のもの13例、60%—65%のもの10例である。

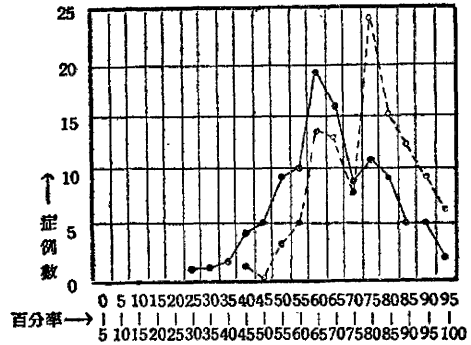
第1表 鼓膜に病變を認めない妊婦總検査數 107 例に於ける聴力百分率と症例數

音叉 例別	聴力百分率	0-5	5-10	10-15	15-20	20-25	25-30	30-35	35-40	40-45	45-50	50-55	55-60	60-65	65-70	70-75	75-80	80-85	85-90	90-95	95-100
		C	右				1	1	1	2	3	9	7	15	12	12	14	13	8	5	1
	左							1	0	0	1	5	5	11	10	23	18	12	11	5	5
C <sup>1</sup>	右									2	3	5	14	17	16	21	12	9	4	4	0
	左										4	4	10	13	20	22	15	11	6	2	
C <sup>2</sup>	右							2	3	7	7	7	19	10	19	13	8	4	4	2	2
	左							1	1	1	4	4	8	11	14	14	14	17	5	4	9
C <sup>3</sup>	右						1	1	2	4	5	9	10	19	16	8	11	9	5	5	2
	左									1	0	3	5	13	12	7	24	15	12	9	6
C <sup>4</sup>	右					1	0	0	1	8	4	11	10	9	13	15	16	7	6	4	2
	左											5	4	8	13	15	18	13	13	4	14

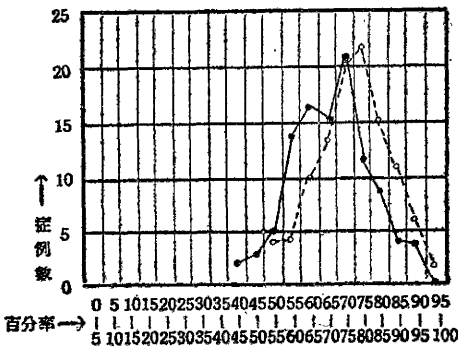
第1圖 C 音又聴力百分率と症例數



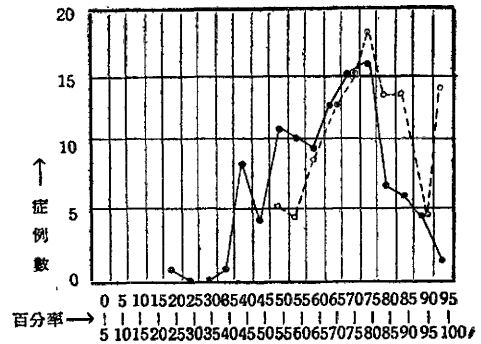
第4圖 C<sup>3</sup>音又聴力百分率と症例數



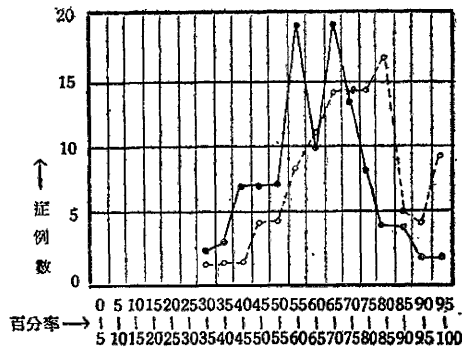
第2圖 C<sup>1</sup>音又聴力百分率と症例數



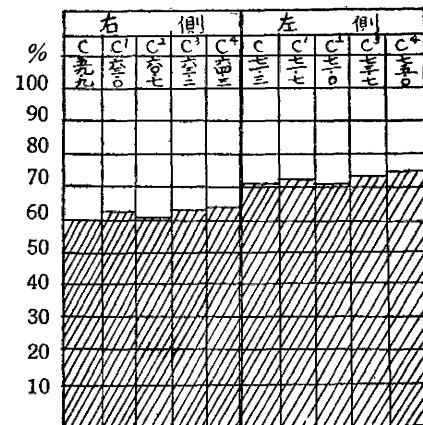
第5圖 C<sup>2</sup>音又聴力百分率と症例數



第3圖 C<sup>2</sup>音又聴力百分率と症例數



第6圖 鼓膜に病變を認めない妊婦  
107例に於ける平均聴力



左側に於ては80%—85%のもの最も多く17例、65%—70%、70%—75%、75%—80%のもの共に14例で之れに次いでいる。

C<sup>3</sup>音又に於ては、右側は60%—65%のもの最も多く19例を算へ、65%—70%のもの16例で之れに次ぎ、55%—60%のもの10例である。左側

に於ては75%—80%のもの最も多く24例を算へ、80%—85%のもの15例で之れに次ぎ、60%—65%のもの13例である。

C<sup>4</sup>音叉に於ては、右側は75%—80%のもの最も多く16例であり、70%—75%のもの15例、65%—70%のもの13例である。左側は75%—80%のもの18例で最も多く、70%—75%のもの15例、80%—85%、85%—90%のもの共に13例である。

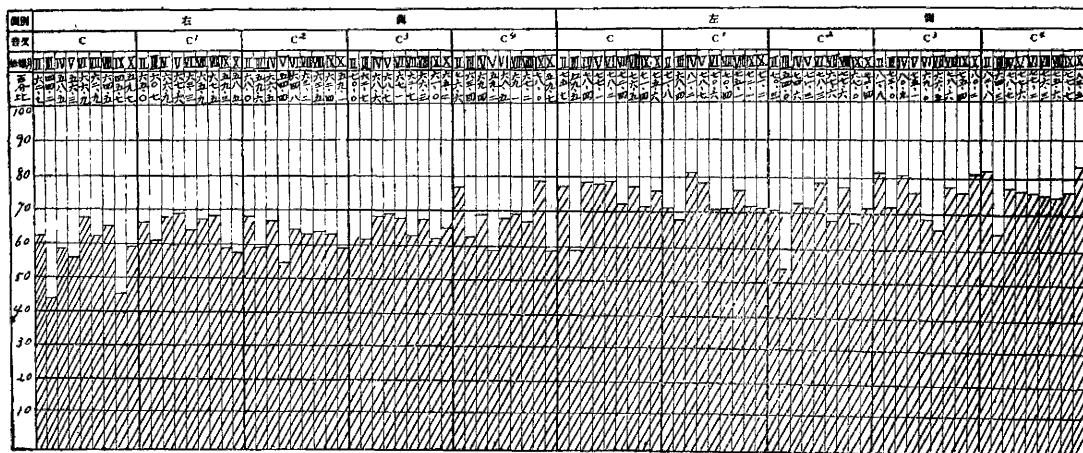
次に妊婦107例に於ける平均聴力を求めると、

第6圖の如くである。即ち CC<sup>1</sup>C<sup>2</sup>C<sup>3</sup>C<sup>4</sup> 全音叉に亘り兩側共短縮が見られるが、左側が稍良好である。

第2項 聴力と妊娠月數との關係

鼓膜に病變を認めない妊娠84名に於ける聴力百分率と妊娠月數との關係を檢査し、第7圖の如き結果を得た。

第7圖 鼓膜に病變を認めない症例84名に於ける聴力と妊娠月數との關係



II. 7名, III. 7名, IV. 9名, V. 11名, VI. 9名, VII. 12名, VIII. 13名, IX. 15名, X. 11名,

即ち妊娠各月に於ける各音叉の聴力百分率に就て左右兩側の平均値を求めると、C音叉に於ては、妊娠第3月に於て障碍の度最も高く51.9%を示し、妊娠第9月に於ては58.6%にて之れに次ぎ、次で妊娠第5月(66.7%)、第7月、第10月(67.7%)、第4月(68.5%)、第2月(69.2%)、第8月(70.5%)の順となり、第6月(72.5%)に於て障碍の度が最も尠い、

C<sup>1</sup>音叉に於ては、妊娠第9月(58.6%)に於て障碍の度最も高く、妊娠第3月に於ては64.6%にて之れに次ぎ、次で妊娠第5月(66.7%)、第7月、第10月(67.7%)、第2月(68.4%)、第4月(68.5%)、第8月(70.5%)、第6月(72.5%)の順である。

C<sup>2</sup>音叉に於ては、妊娠第3月(56.8%)に於て障碍の度最も高く、妊娠第5月に於ては62.9%にて之れに次ぎ、次で妊娠第9月(64.7%)、第

7月(65.4%)、第10月(65.8%)、第2月(69.2%)、第4月、第8月(70.6%)、第6月(71.6%)の順である。

C<sup>3</sup>音叉に於ては、妊娠第5月(62.9%)に於て障碍の度最も高く、妊娠第7月(64.6%)、第3月(67.9%)之れに次ぎ、次で妊娠第6月(68.1%)、第9月(68.2%)、第8月(72.5%)、第10月(72.7%)、第4月(74.8%)、第2月(75.9%)の順である。

C<sup>4</sup>音叉に於ては、妊娠第3月(63.9%)に於て障碍の度最も高く、妊娠第8月に於ては71.4%にて之れに次ぎ、次で妊娠第10月(71.6%)、第7月(72.7%)、第6月(72.9%)、第5月(73.4%)、第4月(74.1%)、第9月(77.9%)、第2月(79.7%)の順である。

以上により聴力障碍の最も大なる月は妊娠第3月なりと思惟されるが、低調音障碍若しくは

高調音障碍と妊娠月數との關係は不定である。

**第3項** 骨導検査, リンネ氏法検査, デュレ氏法検査

鼓膜に病變を認めない妊婦中より20例40耳を選び, 骨導検査, リンネ氏法検査, デュレ氏法検査を行うに, 次の如くである。

骨導検査	リンネ氏法検査
正常なるもの 24耳	陽性 38耳
短縮せるもの 16耳	陰性 2耳
延長せるもの 0	

デュレ氏法検査

陽性 39耳  
陰性 1耳

**第2節** 鼓膜に貧血を認めた妊婦の聽力

**第1項** 各音叉 (CC<sup>1</sup>C<sup>2</sup>C<sup>3</sup>C<sup>4</sup>) に對する聽力百分率と症例數との關係

鼓膜に貧血を認めた妊婦53名, 總検査數73例に就て CC<sup>1</sup>C<sup>2</sup>C<sup>3</sup>C<sup>4</sup> 各音叉に對する聽力百分率と症例數とに就て檢索するに, 第2表の如くである。

第2表 鼓膜に貧血を認めた妊婦總検査數73例に於ける聽力百分率と症例數

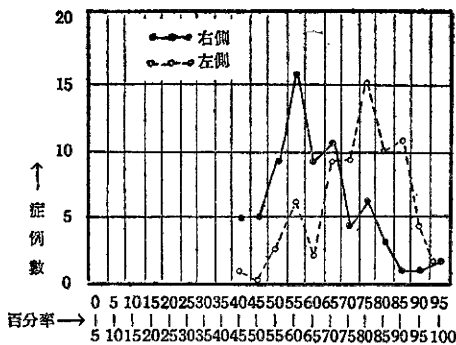
音叉 側別	聽力百分率																			
	0-5	5-10	10-15	15-20	20-25	25-30	30-35	35-40	40-45	45-50	50-55	55-60	60-65	65-70	70-75	75-80	80-85	85-90	90-95	95-100
C	右								5	5	9	16	9	11	4	7	3	1	1	2
	左								1	0	3	7	2	9	9	15	10	11	4	2
C <sup>1</sup>	右					1	0	3	1	2	10	9	13	12	4	6	7	1	1	3
	左										5	4	7	9	4	15	18	6	2	3
C <sup>2</sup>	右						3	0	6	5	9	8	10	5	7	6	2	4	2	6
	左								2	1	3	3	5	10	10	7	7	10	6	9
C <sup>3</sup>	右					1	2	4	2	5	8	6	9	14	3	5	4	3	1	7
	左								1	1	3	2	5	13	3	9	9	12	9	6
C <sup>4</sup>	右	2	0	0	0	0	1	0	2	2	7	9	8	10	4	5	4	7	4	6
	左	1	0	0	0	0	0	0	0	0	2	1	5	7	8	8	7	12	7	12

次に各音叉に就て聽力百分率と症例數との關係を圖示する。(第8圖—第12圖)

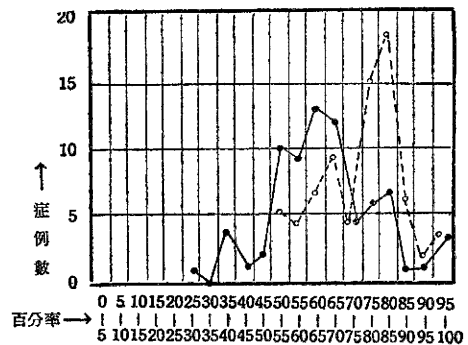
即ちC音叉に於て, 右側は55%—60%のもの

最も多く16例, 次で65%—70%のもの11例, 50%—55%, 60%—65%のものそれぞれ9例となり, 左側に於ては75%—80%のもの最も多く15

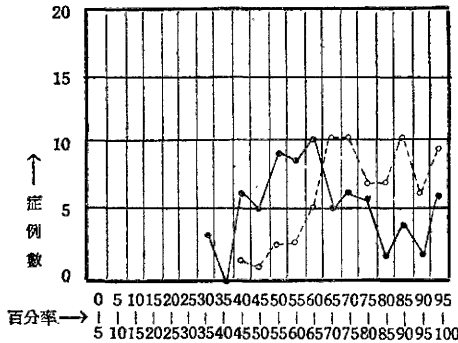
第8圖 C音叉聽力百分率と症例數



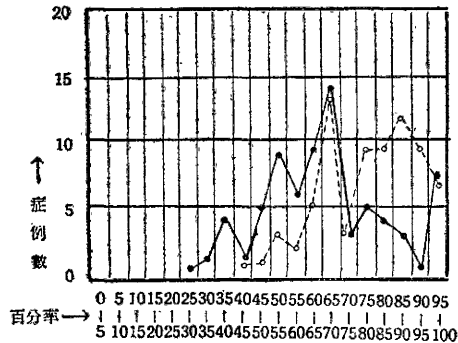
第9圖 C<sup>1</sup>音叉聽力百分率と症例數



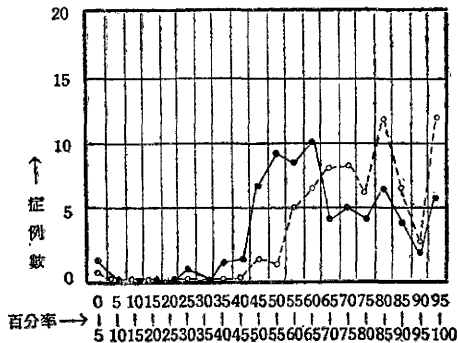
第10圖 C<sup>2</sup>音叉聴力百分率と症例數



第11圖 C<sup>3</sup>音叉聴力百分率と症例數



第12圖 C<sup>4</sup>音叉聴力百分率と症例數



例を數へ、85%–90%のもの11例、80%–85%のもの10例である。

C<sup>3</sup>音叉に於ては、右側は60%–65%のもの最も多く13例、65%–70%のもの12例で之れに次ぎ、50%–55%のもの10例、55%–60%のもの9例である。左側は80%–85%のもの18例で最も多く、次で75%–80%のもの15例、65%–

70%のもの9例の順である。

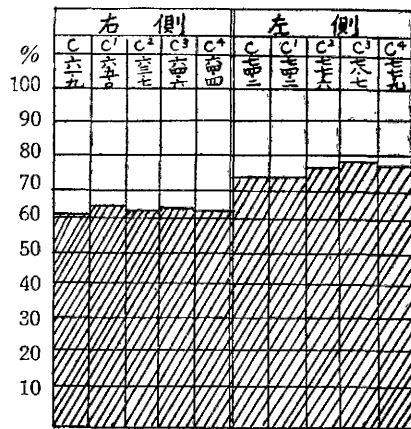
C<sup>2</sup>音叉に於ては、右側は60%–65%のもの最も多く10例、50%–55%のもの9例で之れに次ぎ、55%–60%のもの8例である。左側に於ては65%–70%、70%–75%、85%–90%のもの共に10例で最も多く、次で95%–100%のもの9例、75%–80%、80%–85%のものそれぞれ7例である。

C<sup>3</sup>音叉に於ては65%–70%のもの14例で最も多く、次で60%–65%のもの9例、50%–55%のもの8例であり、左側に於ては65%–70%のもの13例で最も多く、次で85%–90%のもの12例、90%–95%のもの9例である。

C<sup>4</sup>音叉に於ては60%–65%のもの最も多く10例を算へ、次で50%–55%のもの9例、55%–60%のもの8例であり、左側に於ては80%–85%、95%–100%のものそれぞれ12例で最も多く、次で65%–70%、70%–75%のものそれぞれ8例であり、60%–65%、75%–80%、85%–90%のもの共に7例である。

次に妊娠73例に於ける平均聴力を求めると、第13圖の如くである。即ち C<sup>1</sup>C<sup>2</sup>C<sup>3</sup>C<sup>4</sup> 全音叉に亘り兩側共短縮が見られる。

第13圖 鼓膜に貧血を認めた症例73例に於ける平均聴力

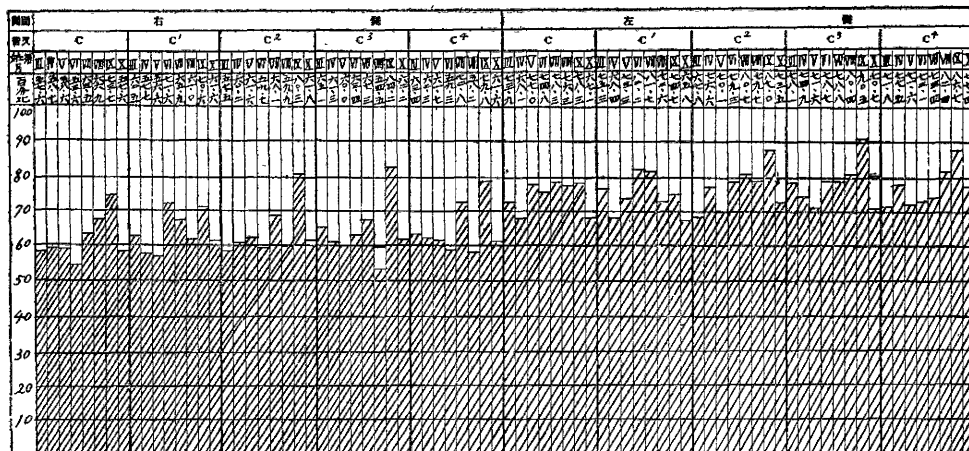


第2項 聴力と妊娠月數との關係

鼓膜に貧血を認めた症例55名に於ける聴力百

分率と妊娠月數との關係を檢索し、第14圖の如き結果を得た。

第14圖 鼓膜に貧血を認めた症例55名に於ける聴力と妊娠月數との關係



III. 7名, IV. 8名, V. 5名, VI. 8名, VII. 5名, VIII. 9名, IX. 8名, X. 5名,

即ち妊娠各月に於ける各音叉の聴力百分率に就て左右兩側の平均値を求めると、C音叉に於ては、妊娠第10月に於て障礙の度最も高く62.4%を示し、妊娠第4月に於ては63.4%にて之れに次ぎ、次で妊娠第6月(64.2%)、第3月(65.8%)、第5月(67.8%)、第7月(70.9%)、第8月(71.6%)の順となり、第9月(76.0%)に於て障礙の度が最も少い。

C'音叉に於ては、妊娠第4月(63.1%)に於て障礙の度最も高く、妊娠第10月に於ては63.7%にて之れに次ぎ、次で妊娠第5月(64.9%)、第8月(66.8%)、第3月(68.9%)、第9月(72.7%)、第7月(73.8%)、第6月(76.9%)の順である。

C''音叉に於ては、妊娠第3月(62.7%)に於て障礙の度最も高く、妊娠第5月に於ては65.9%にて之れに次ぎ、次で妊娠第10月(67.7%)、第4月(68.4%)、第6月(69.5%)、第8月(69.8%)、第7月(74.4%)、第9月(83.6%)の順である。

C'''音叉に於ては、妊娠第5月に於て障礙の度最も高く、妊娠第10月(66.5%)之れに次ぎ、次で妊娠第8月(67.5%)、第4月(68.1%)、第6

月(71.1%)、第3月(71.6%)、第7月(73.1%)、第9月(87.4%)の順である。

C''''音叉に於ては、妊娠第6月(65.7%)に於て障礙の度最も高く、妊娠第5月に於ては66.7%にて之れに次ぎ、次で妊娠第3月(67.6%)、第10月(69.7%)、第4月(69.9%)、第8月(70.3%)、第7月(73.1%)、第9月(83.3%)の順である。

低調音障礙若しくは高調音障礙と妊娠月數との關係は不定である。

第3項 骨導検査, リンネ氏法検査, デュレ氏法検査

鼓膜に貧血を認めた妊婦22例44耳を選び、骨導検査, リンネ氏法検査, デュレ氏法検査を施行した。

骨導検査	リンネ氏法検査
正常なるもの 20耳	陽性 44耳
短縮せるもの 23耳	陰性 0
延長せるもの 1耳	
デュレ氏法検査	
陽性 41耳	
陰性 3耳	

第3節 分娩前並に産褥時に於ける聴力

**第1項 産褥時1回観察した**

27例に於ける聴力

(1) 鼓膜に病變を認めない褥婦7例に於ける聴力

鼓膜に病變を認めない褥婦7例に就き、分娩前並に産褥時に於て各音叉(CC<sup>1</sup>C<sup>2</sup>C<sup>3</sup>C<sup>4</sup>)に對する聴力百分率を検索した。(附圖省略)

(2) 鼓膜に貧血を認めた褥婦8例に於ける聴力

鼓膜に貧血像を認めた褥婦8例に就き、分娩

前並に産褥時に於て各音叉(CC<sup>1</sup>C<sup>2</sup>C<sup>3</sup>C<sup>4</sup>)の聴力百分率を検索した。(附圖省略)

(3) 鼓膜に病變を認めた褥婦12例に於ける聴力

鼓膜に病變を認めた褥婦12例に就き、分娩前並に産褥時に於て各音叉(CC<sup>1</sup>C<sup>2</sup>C<sup>3</sup>C<sup>4</sup>)の聴力百分率を検索した。(附圖省略)

以上27例に於ける検査成績を總括すれば、第3表の如くである。

即ち兩側共良くなるもの12例、一側良、他側

第3表 分娩前並に産褥時に於ける聴力  
(産褥時1回検査した27例に於ける觀察)

鼓膜所見	聴力推移		兩側共良くなるもの	一側良他側不變	一側良他側一部良一部不良	兩側一部良一部不良	一側不良他側不變	兩側不良
	検査時日							
鼓膜に病變を認めないもの	當第1日		1					
	第3日		1		1			
	第7日		1				1	1
	第10日		1					
鼓膜に貧血を認めたもの	當第3日		1					
	第4日		3	1				
	第5日		1					1
	第6日		1					
鼓膜に病變を認めたもの	當第1日				1			
	第2日				1	1		1
	第3日		2					2
	第4日							1
	第6日				1	1		
計			12	1	4	3	1	6

不變なもの1例、一側良、他側一部良、一部不良なもの4例、兩側一部良、一部不良なもの3例、一側不良、他側不變なもの1例、兩側不良なもの6例が見られ、從つて妊娠により招來されたと考へられる聴力障碍は、分娩により一時増悪した例も見られるが、産褥の経過と共に比較的短時日に恢復するものと思惟される。

**第2項 産褥時2回乃至6回觀察**

し得た16例に於ける聴力

(1) 鼓膜に病變を認めない褥婦5例に於ける聴力

鼓膜に病變を認めない褥婦5例に就き、分娩前並に産褥時に於て各音叉(CC<sup>1</sup>C<sup>2</sup>C<sup>3</sup>C<sup>4</sup>)の聴力百分率を検索した。(附圖省略)



(2) 鼓膜に貧血を認めた褥婦 3 例に於ける聴力

鼓膜に貧血像を認めた褥婦 3 例に就き、分娩前並に産褥時に於て各音叉(CC<sup>1</sup>C<sup>2</sup>C<sup>3</sup>C<sup>4</sup>)の聴力百分率を検索した。(附圖省略)

(3) 鼓膜に病變を認めた褥婦 8 例に於ける

聴力

鼓膜に病變を認めた褥婦 8 例に就き、分娩前並に産褥時に於て各音叉(CC<sup>1</sup>C<sup>2</sup>C<sup>3</sup>C<sup>4</sup>)の聴力百分率を検索した。(附圖省略)

以上16例に於ける検査成績を總括すれば、第4表の如くである。

第 4 表 分娩前並に産褥時に於ける聴力  
(産褥時 2 回乃至 6 回検査した16例に於ける觀察)

聴力の推移 鼓膜病變の有無	兩側次第に良		一側良, 他側始め不良, 後良		一側良他側不良		兩側始め不良後良		兩側殆んど不變	
	症例數	分娩後検査時日	症例數	分娩後検査時日	症例數	分娩後検査時日	症例數	分娩後検査時日	症例數	分娩後検査時日
病變を認めないもの	3	(1,4,7) (1,4,7,11) (1,8,11)	1	(1,4)	1	(3,10)	0		0	
貧血を認めたもの	2	(當,1,3) (1,11)	1	(6,7)	0		0		0	
病變を認めたもの	3	(1,2,3,4) (2,5) (6,7,8)	2	(1,3,6) (1,4,8,11,15,19)	0		1	(2,17,18)	2	(3,6) (3,13)
計	8		4		1		1		2	

即ち聴力の兩側共次第に良くなるもの 8 例, 一側良, 他側始め不良で後良くなるもの 4 例, 一側良, 他側不良なもの 1 例, 兩側始め不良で後良くなるもの 1 例, 兩側殆んど不變なもの 2

例であつて、聴力は分娩により一時増悪する例も見られるが、一般に産褥の経過と共に比較的短時日に次第に恢復するものと思惟される。

#### 第4章 總括並に考按

婦人が妊娠並に産褥時に於て心身の受ける影響は大きく、従つて妊娠並に産褥が耳鼻咽喉科領域に及ぼす影響も亦尠くないものと考へられる。妊娠時耳鼻咽喉科領域に於て見られる自覺症に就ては、未だ内外の文獻に記載されるところが尠い。昭和13年松田教授は外來患者並に女子工員等 138 名の妊婦に就て、上記自覺症の統計的觀察を行つておられるが、聴器に就て難聴を自覺したものを調査人員の 2.9% に於て認めており、其の他耳鳴、耳閉塞感を訴へたものを同率に認めた。又鈴木、小泉兩氏の調査した所に依れば、何等自覺症状のない妊産婦に於ても、多數例に於て或る程度の難聴が認められると述べているが、かゝる聴力障碍は妊娠並に産褥により惹起せられたものと思惟されるのであ

つて、著者はかゝる觀點から、何等自覺症状を有しない妊婦 181 名並に産褥婦 43 名を選び、其の聴力に就き検索を行つたのである。

妊娠並に産褥時に於ける鼓膜の他覺的異常所見に就ては記載されたもの尠く、外國に於ては Willig は鼓膜に類脂肪弓を認めたと述べ、我國に於ては小泉氏が脂肪弓に就て記載している。教室西村氏は 306 例の妊産婦を觀察し、110 例 35.95% に於て鼓膜に貧血を認め、かゝる貧血像は大多數の例に於て兩側同程度に存在し、妊娠月數の進行と共に多少増強すると述べている。

著者は妊婦 181 例中 77 例、褥婦 43 例中 11 例に於て鼓膜に貧血像を認めた。

##### 第1節 妊娠時に於ける聴力

鼓膜に病變を認めない妊婦總検査數 107 例、

貧血を認めた妊婦總検査數73例に於ける各音叉 (CC<sup>1</sup>C<sup>2</sup>C<sup>3</sup>C<sup>4</sup>) の聽力百分率と症例數を検索し、且つそれ等の平均聽力を検索した結果低調音、高調音共に量的短縮が認められ、Willig の説へた内耳性のみでは説明し難く、むしろ鈴木、小泉兩氏の報告と略一致する。骨導検査に於ては84耳中39耳に於て短縮し、1耳に於て延長した外は正常であり、リンネ氏法検査に於ては陽性82耳、陰性2耳であり、デュレ氏法亦陽性80耳、陰性4耳である。

即ち著者の例に於ては、Stein の記載した如き耳硬化症は認め難く、むしろ一種の神経性難聴と見做さるべきものである。

聽力障碍と妊娠月數との關係に於ては、各音叉に就て其の百分率を見たところ、鼓膜に病變のないものと貧血像を認めたものとの間に大差は認め難い。又妊娠各月に於ける聽力百分率に就て、鼓膜に病變のないもの並に貧血像を認めたものゝ平均値を求めると、妊娠第2月に於ける CC<sup>1</sup>C<sup>2</sup>C<sup>3</sup>C<sup>4</sup> 各音叉の平均百分率は 69.2%、68.4%、69.2%、75.9%、79.7%にして、妊娠第3月に於てはそれぞれ 58.9%、66.8%、59.8%、69.8%、65.8%であり、妊娠第4月に於ては 65.9%、65.8%、69.5%、71.5%、72.0%である。又妊娠第5月の平均百分率は 67.2%、65.8%、64.4%、64.4%、70.1%にして、妊娠第6月に於てはそれぞれ 68.3%、74.7%、70.6%、69.6%、69.3%であり、妊娠第7月に於ては 69.3%、70.8%、69.9%、68.9%、72.9%である。次に妊娠第8月に於ける平均百分率は 71.1%、68.7%、70.2%、70.0%、70.9%にして、妊娠第9月に於ては 67.3%、65.7%、74.2%、77.8%、80.6%

であり、妊娠第10月に於ては 65.1%、65.7%、66.8%、69.6%、70.7%である。即ち妊娠第3月に於ける聽力障碍は一般に他の月に於けるより高く、鈴木氏の記載した妊娠週期との關係は全く不定なりとする説とは聊か其の結果を異にする。即ち本實驗に於ては、妊娠第3月に於ける障碍の度高く妊娠悪阻との關係が考慮される、然し他の各月との間に於ける關係は不定である。

## 第2節 分娩前並に産褥時に於ける聽力

産褥婦43名に就き、分娩前並に産褥時1回乃至6回検索した成績を總括すると、次の如くである。

兩側共聽力の良くなるもの	20例
一側良、他側始不良で後良くなるもの	4例
一側良、他側不變なもの	1例
一側良、他側一部良一部不良なもの	4例
一側良、他側不良なるもの	1例
兩側一部良、一部不良なもの	3例
兩側初め不良で後良くなるもの	1例
一側不良、他側不變なもの	1例
兩側殆んど不變なもの	2例
兩側不良なもの	6例

即ち妊娠により誘發されたと思考される聽力障碍は分娩により一時的に増悪することがあるが、産褥の経過と共に次第に恢復し、且つ多數例に於ては比較的短時日に妊娠前の聽力に復歸するものと思せられ、一部先人の記載している如く分娩後比較的長時日を要するものゝみではないと思惟される。

## 第5章 結 論

著者は348名の妊婦並に産褥婦に就て妊娠期間中並に分娩前後の聽力を検索し、次の結果を得た。

(1) 妊婦181例中77例、産褥婦43例中11例に於て鼓膜に貧血像を認めた。

(2) 妊娠時の聽力障碍は低調音、高調音に亘り殆んど全例に於て認められ、且つ兩側同程度であり、ときに片側に於て稍高い。

(3) 骨導は多數例に於て短縮を認めた。

(4) リンネ氏症候は多くの場合陽性であり、

デュレ氏法亦多數例に於て陽性である。

(5) 聴力障碍と妊娠月數との關係に於て、障碍の最も高いのは妊娠第3月であり、妊娠悪阻との關係が考慮されるが、他の各月との間には一定の關係はないものゝようである。

(6) 産褥時に於ける聴力障碍は分娩により一時的に増悪することがあるが、産褥の経過と共に多數例に於ては比較的短時日で妊娠前の聴力

に復歸するものと思考せられ、一部先人の記載している如く長時日を要するものゝみではないと思惟される。

稿を終るに臨み御懇篤な御指導と御校閲の勞を賜つた恩師松田教授に深謝すると共に、種々御便宜を賜つた前金澤日赤支部産院長小牧博士、現産院長中郷博士に深甚な謝意を表する。

主 要 文 獻

1) 倉田：大日本耳鼻咽喉科會報，38卷，12號，1424-1451. 2) 小泉：北越醫學會雜誌，53年，2號，145. 3) 鈴木：臨床産科，5卷，5號. 4) Stein：Monatschr. f. Ohrenheilk. u. Laryngo-Rhinol. 1925, Bd. 59, 5, 511-556.

5) Willig：Archiv. f. Ohren-, Nasen- u. Kehlkopfheilk. 1929, Bd. 120, 133-140. 6) 松田：大日本耳鼻咽喉科學會42回總會宿題報告. 7) Muck：Zeitschr. f. Hals-Nasen- und Ohrenheilk. 1926, Bd. 14, 441-445.

# 腸内消毒剤

然し乍ら一般に  
體液に移行する  
爲め効果を期待  
出来ない

細菌性下痢  
赤痢・疫痢  
大腸炎  
傳染性腸疾患

1 サルファ劑が赤痢菌・大腸菌等に有効な事は周知の事實である

2

3 本劑はこの缺點を除去し腸内に到達して直接有害菌に作用する

製法特許 175501

## フタリヂン

カセイ

製造元 三菱化成工業株式会社化成本部

販賣元 株式会社 中村 龍商店